

## 「便所」を死語にした？下水道

理事 中西正弘

私の所属する、ある下水道のNPO研究会の仲間に、便所という言葉について他になんという言い方があるか調べた人がいる。高校の歴史の教師だが、全国、一部外国も含め集めた。方言や隠語を含め約1,100の言い方があり、それぞれについて様々な角度から考察し、著作にまとめている。題名は「便所異覧集覧」。興味深い著書である。



まあ、雪隠、厠、WC（ワシントン・クラブ）、トイレット、手洗い、はばかり、ご不浄…などは一般的によく知られているところだが、1,000以上あるとはよく調べたものである。便所は大小便をする所で、臭いし不浄なところなのでストレートに言いにくいから、品のいい言い方をするためいろいろな表現が増えたのであろう。

ところで、最近、便所を便所という人は少ない。ほとんどの人がトイレ。トイレットの略語である。建物などの案内表示もトイレと書いている。「便所はどこにありますか」と尋ねるのを聞かない。数十年前の住宅の設計図には便所と書いてあったが、今はトイレになっている。

なぜ、便所と言わなくなったのだろうか。大便、小便、便座、便秘など便のつく言葉は普通に使われている。トイレのような代わる適当な言い方がないのか、口に出しても抵抗なくいえるためか。

が、便所だけが使われなくなった。便は抵抗ないが、便所の「じょ」がつくと語感がよくないのだろうか。それなら、便室（べんしつ）、台所ならぬ「べんどころ」はどうか。

くみ取り式の時は自分の排泄物も他人のものも溜めてあり、臭っていた。まさに便所であった。くみ取り式と比べると水洗化された今は快適そのもの。臭う便は水で流して目の前からさ

っと消える。今は中でゆっくり新聞を見る人もいる。くみ取り式ではそういうことする人はいない。

下水道（浄化槽も含む）の普及が便所という言葉の死語にしたのかも知れない。



奈良時代の土穴式便所の復元模型

## 2022年度活動報告

### 研究会報告『下水道マンホール蓋のこれまでと今後～その管理と新たな取組み～』

管路分科会会員 石川高輝

1月27日開催の研究会は、標記テーマにてフルオンライン方式で行われ、関係者を含め81名が参加した。

マンホール蓋は、我国に約1,600万基が設置されており、鑄鉄製であることから本体に比べ耐用年数が短く、点検・更新等が大きな課題となっている。このことより研究会では、マンホール蓋の設置や維持管理に携わる地方公共団体をはじめ、関係団体から話題提供を頂き、インフラ更新時代でのマンホール蓋の管理と新たな取組みについて行った。

集会は、栗原理事長の挨拶から始まり、話題は、(一社)日本グラウンドマンホール工業会 手嶋泰三氏「マンホール蓋の変遷と維持管理」、(公社)日本下水道管路管理業協会 深谷渉氏「マンホール蓋の開閉から始まる管路管理」、(株)G&U技術研究センター 所長 尾崎正明氏「マンホール蓋の必要機能とその性能評価」、横浜市管路整備課長 黒羽根能生氏「横浜市のマンホール蓋について」等が提供され、各講師とも内容の濃い発

表であった。



総合討論は、マンホール蓋を取り巻く内外の環境について、マンホール聖戦を紹介、マンホール蓋のこれまでと今後について行い、マネジメント上での重要な要素である、データ収集・リスク評価・管理と新たな取り組みについて議論した。また、IoT 社会と蓋の進化では、マンホール蓋に計測機器を設置し、管内流量・硫化水素濃度測定を行う等の技術開発が紹介された。

質疑では、3名の方より感想やコメントが寄せられた。

最後に司会の石川会員の総括では、マンホール蓋が時代の変化に対応、改善が行われてきたこと、デザインマンホールの普及、下水道施設の見える化推進における、マンホールカードによるマンホール蓋人気、新たな領域での利用価値の発生等が述べられた。また、新規取組みとして、これからの管理上でのヒントに繋がる討論が行われ、マンホール蓋から始まる下水道のパラダイムシフトが起こりつつあることが付け加えられた。



総合討論の講師(前席)と司会(後席)

## 編集幹事のあと整理

- 1月27日に開催された管路分科会研究集会の報告文を分科会会員の石川高輝氏からいただきました。氏はNLには初めて登場していただきました。文中写真では司会席に座っておられます。もう1人のかたは秋山礼子理事。完全オンライン開催方式なので、中継会議室にはそのほか講師4方と裏方の分科会会員のみになっています。
- 巻頭文は中西理事。「便所」(べんどころ、と読んで)は便が「溜まっている」ところ、の意味にわたしは理解しました。いまはフラッシュバルブであつという間に管渠の彼方に消えてくれます。これでトイレになったのですね。
- 会員日よりコーナーへの投稿を募集しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月